

「檜枝岐歌舞伎」 芸歴 50 年の星幸雄さんに聞く



「絵本太功記 尼ヶ崎の段（十段目）」で、光秀の母、皐月（さつき）を演じた星幸雄さん（左）（2022年6月24日）

2023年1月、檜枝岐歌舞伎「千葉之家花駒座」の新年初顔合わせとなる総会で、芸歴50年のベテラン、星幸雄（ゆきお）さんの退座が、星昭仁座長から告げられた。前年6月24日の「千葉之家花駒座」百周年特別公演「絵本太功記 尼ヶ崎の段（十段目）」で皐月を演じたのが最後の舞台となった。

昭和43年、18歳で檜枝岐村役場の職員となった幸雄さんは、あるとき、同級生とともに村長室に呼ばれた。当時の村長、星保忠氏は、少し前まで「千葉之家花駒座」の座長をしていた人で、二人に「歌舞伎をやってみないか」と切り出した。新人の身で断るわけにはいかなかった。

22歳で最初の役をもらって以来、（ご本人曰く）恰幅の良さから、一枚目（主役）を任されることが多かった。35歳でおばあさん役（『奥州安達ヶ原 袖萩祭文の段（三段目）』の浜夕）をやり、39歳で初挑戦した『一之谷嫩（ふたば）軍記 熊谷陣屋の段（三段目）』の熊谷次郎直実役が、幸雄さんの十八番となった。

檜枝岐歌舞伎では、「一口上（こうじょう）、二眼（がん）、三振り」が、演じる上での基本とされている。一番大事なのはセリフで、次に目、その後に動作がくる。9月に訪ねたとき、幸雄さんが語ってくれた。

「最初はちょっともじもじしたり、普通の話し言葉みたいにしてやるでしょ。何年か経って声が出るようになる時を、“ふっきる”と言うんですよ。ふっきれたときに本当に通るいい声になる。皐月はおばあさんで手負いでしょ。大きい声では駄目なんです。通る声でない」と。



以前は二幕を二晩やっていたが、今は一晩一幕なので演じる機会が少ない。次に同じ役をやるのが何年も先になることもあり、芸を極めるのも難しくなったという。

「手の先が結構大事なんです。初めの頃は指先まで力がいかないんですね。口上を間違っちゃあなんないとか、そういうことばかり気にして役になりきれない。内容が分かって慣れてきた頃には、今度は頭と体がついていかなくなる。若い頃は練習すれば覚えていられますよ。ところが年を取ると何でもない平らな所でポーンと飛んじゃう」。

最後の舞台となった「絵本太功記 尼ヶ崎の段（十段目）」。皐月を演じる予定だった女性が、ひと月前に怪我をしたため、幸雄さんが急遽代役を務めることになった。

この演目で、皐月の孫の十次郎は、許嫁の初菊と祝言をあげるとすぐに初陣に赴く。可愛い孫が新妻を残し、討ち死に覚悟で出ていくのを、皐月はただ見送ることしかできない。一連のシーンで、行き場のない悲しみを一番雄弁に語っていたのは、セリフも大きな身振りもない皐月の面持ちだった。

若手座員が「レジェンド」と呼ぶ幸雄さんの有終の美を目に焼き付けることができたのは、私にとって幸運だった。ただ、幸雄さんが演じる熊谷直実を生で観ることが叶わなかったのが残念でならない。幸雄さん、お疲れさまでした。